

【学会レビュー】

日本マンガ学会第12回大会

(明治大学駿河台キャンパス, 2012年6月23, 24日)

木内英太

2012年6月23日(土)・24日(日)の2日間、明治大学駿河台キャンパス・リバティタワーにおいて、日本マンガ学会第12回大会が開催された。筆者は、大会第一日目は所属する江戸川大学のオープンキャンパスのため参加できず、第二日目のシンポジウムのみ参加した。

シンポジウムのテーマは「マンガと同人誌」であった。日本マンガ学会は学者・研究者だけの集まりではなく、シンポジウムのパネリストも多方面にわたっているので、シンポジウムのパネリストの方々を紹介させていただく。第一部は「マンガ同人誌の歴史と役割」で、村上知彦氏〔神戸松蔭女子学院大学教授〕の司会で、真崎守氏〔マンガ家・アニメ演出家〕、霜月たかな氏〔コミックマーケット初代代表・フリーライター〕、波津彬子氏〔マンガ家、マンガ同人誌『らっぽり』主宰〕、中村公彦氏〔同人誌即売会コミティア代表〕がパネリストとして登壇されて、同人誌の歴史、役割、そして将来の可能性と抱えている課題について話された。

現在では愛好者がたいへん多い同人誌のコミュニティの規模が拡大していく過程、そして「ヤマなし・オチなし・イミなし」を意味する「やおい」など、マンガを語る上で欠かせない概念だがいかなる経緯でできたのか知られていない用語につい

て、その歴史を紐解き興味深かった。

第二部は「二次創作の可能性と課題」と題され、藤本由香里氏〔明治大学国際日本学部准教授〕の司会で、赤松健氏〔マンガ家・Jコミ主宰〕、井上伸一郎氏〔角川書店代表取締役社長〕、福井健策氏〔弁護士〕、三崎尚人氏〔同人誌研究家／まんが評論家〕がパネリストであった。

コミックマーケットなどのイベントでは、著作権を所有する出版社などと同人コミュニティが共存しているが、二次創作の著作権については現在でもどこからが違反となるのかの白黒がつかず、グレーのままであり、さまざまな問題がある。

知的財産法や著作権法の問題を回避するためにローレンス・レッシングなどが唱えたクリエイティブ・コモンズを適用して、あとは自由にする、と仮定しても考えられる問題や、もし日本がTPPに参加して、アメリカの提案するフェアユース規定に日本も従うとしたら起こる問題など、数多くの指摘がなされ、実りが多いシンポジウムだった。

『魔法先生ネギま!』の連載をひとまず完結された赤松健先生が、飄々とした話し方で笑いを取りながらも、同人誌の今後について真摯に具体的な提言をなさっていたのが、同人誌を含むマンガ全体への愛が感じられ、特に印象的だった。